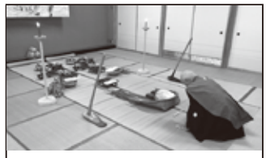
写真 / 秋吉公民館で蓑（みの）作りを指導する堂下久子さん（上）

公民館の底力

地域の学びの場である「公民館」。町内15公民館下には、それぞれ特徴的な「文化」「神事」「行事」などがある。これら地域の特徴を地域づくりに生かすために、町が平成24年度から実施する「公民館特色ある活動事業」。その取り組みを通して、改めて公民館の意義や役割を考えてみたい。

町内 15 の公民館が取り組んだ特色ある事業

各地域の公民館が地域の特色を生かした事業に取り組みました。
※網掛けの公民館は、次ページ以降に紹介。



神野公民館

あえのこと儀式の実演

迎えと送りのあえのこと実演のほか、甘酒作り教室も開催。保存会発足に向けて取り組む。

高倉公民館

高倉地区作品展

第 34 回目を数える作品展。地区の園児や小学生の作品を含む百数十点の作品を展示した。

宇出津公民館

婦人学級段ボールコンポストづくり

地区婦人会と協力し、段ボールコンポスト作り教室を開催し、生ゴミの削減を行った。

松波公民館

そば打ち体験

地域内で栽培している「そばの実」を利用し、親子や住民対象のそば打ち体験を 2 回行った。

瑞穂公民館

男の料理教室から地域の名物づくり

男性が料理を勉強する料理教室を開催予定。現在男性が考案した地域の名物を開発中。

鵜川公民館

親子でミニにわか作り・うかわ今昔暦

1/10 サイズのにわかを親子で製作。町並みの変化や地域の歴史をカレンダーにまとめた。

三波公民館

三波で磯釣り

竹竿づくり教室を開催したほか、講師を交えて春、夏、秋に磯釣り大会を開催した。

小木公民館

「小木よもやま話」刊行

小木地区の歴史や情景などが分かるよもやま話を制作。子どもたちとカルタ作りを行った。

白丸公民館

白丸曳山歌「きやらげ」伝承

白丸曳山歌「きやらげ」教室を開催。現在は全 42 曲入りの伝承ＣＤを制作中。

不動寺公民館

木郎里づくり地域再発見

水車小屋茅葺きの葺き替え研修、ウオーキング大会、音楽会、地域再発見講演会を開催。

秋吉公民館

紙飛行機大会の充実・アマメハギ交流伝承

全町民対象の紙飛行機大会の開催。アマメハギで使用する蓑作り教室を開催。

岩井戸公民館

岩井戸地区今昔物語写真集刊行

昔と現在の家並みや歴史が伝わる写真集を製作中。完成後は上映会を開催予定。

小間生公民館

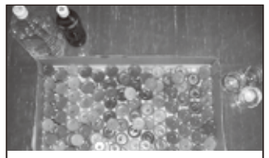
久田和紙の伝統文化継承

柳田・小木中学校の生徒と地域が協力し、休耕地にコウゾの移植・植栽活動を行った。

上町公民館

クリスマスツリー点灯式・昔話伝承 ほか

クリスマス飾り作り教室を開催し、点灯式を行う。寺分地区の宝暦杉の歴史を演劇化。



柳田公民館

灯りの祭典 in やなぎだ

地域から廃食用油を集めてエコキャンドルを制作し、灯りの祭典を開催した。

秋吉公民館

Akiyoshi Community Learning Center

【所在地】字秋吉 7-57
【世帯数】148
【公民館長】竹中省三
【電話】72-0006

【右】18人が5つのグループに分かれ蓑を作った。制作期間は6日。この日は千葉県から堂下さんの技を学びに訪れた人も。
【上】1月16日夕方はNHK金沢放送局の生中継。子どもたちもアマメハギに扮して出演。
【下】アマメハギで使われる道具。今年は新調された蓑で行われる。

アマメハギの里にある秋吉公民館。子どもたちが主役の文化は少子化の影響を強く受ける。地域と公民館が協働で保存・継承の第一歩を踏み出した。

「秋吉公民館の自慢は、地域の皆さんが公民館活動にとても協力的なことです」と語る竹中省三館長。今年度、特色ある事業で取りかかった蓑（みの）作りでも「原料となるわらの提供やねいご（稲の穂が付いていた部分）抜きの協力を呼びかけたところ、予想以上の協力が得られて本当に感謝しています」と目を細める。

毎年2月3日、鬼の面を付けた子どもたちが蓑をまとって家々を回るアマメハギは、秋吉公民館地区だけに伝わる伝統行事で国指定重要無形民俗文化財。しかし、蓑の文化が今も残るこの地域でも、編み方を知る人は途絶え、現存する蓑は年々傷みが激しくなっていたという。

「指導してくれる人がいるうちに、蓑作りを伝承しようと、アマメハギ保存会と話し合いました」

竹中さんは町内で数少ない蓑編み技術を持つ堂下久子さん（78）＝上＝に指導を依頼。住民18人が集まって協力しながら5着の蓑を新調した。

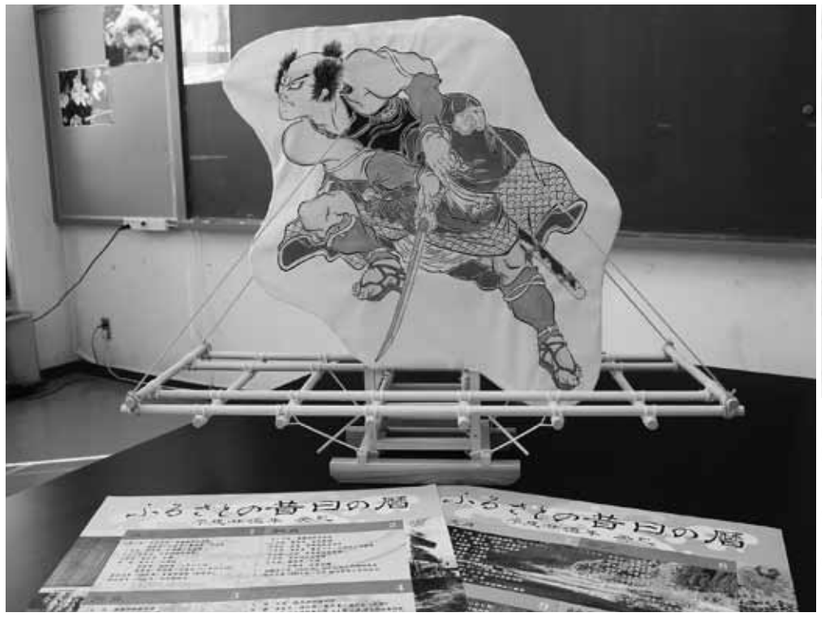
「やってみると非常に難しかったですが、参加者は熱心に協力的に取り組んでくれました。活動しながら、地域の文化を伝承していきたいという思いもさらに強くなりました」

秋吉公民館は今年度、地域との『協働』を掲げて活動している。蓑作りも保存会との協働で取り組んだ。

「公民館だけでできないことは、地域の皆さんと一緒にやります。公民館活動には住民の理解と協力が不可欠です。活動を通して意識をいかに変えていくか。その過程を大切にして、これからも活動を積み重ねていきたい」

長い年月で培われた住民と公民館の協力関係が、地域に活力を生む。

竹中省三 館長



【左】鵜川公民館が制作した「ミニにわか」とカレンダー。ミニにわかは本物の10分の1の大きさ。
【上】担ぎ棒の縛りなども本物と同じ結び方をするこだわり。親子での制作には3カ月かかった。
【下】カレンダーには1959年8月の鵜川大水や古いイドリ祭りの写真なども掲載。A1判で500枚印刷。

鵜川公民館

Ukawa Community Learning Center

【所在地】字鵜川 18-128
【世帯数】495
【公民館長】梅田真人
【電話】67-1919

町内で最も古い歴史を持つ鵜川公民館。地域の歴史をひもとき、先人に学ぶことで、ふるさとの魅力を再発見し、郷土愛を育んでいる。

鵜川公民館は今年度、特色ある事業の予算を使って『ミニにわか』作りと鵜川地区の歴史を記したカレンダー制作に取り組んだ。

「自分が住んでいる地域、育った地域に誇りと愛情を持ってもらいたい」と話す梅田真人館長。「自分が子どものころは、自作したミニにわかを引っ張りながら町内を練り歩いていました」と振り返る。

ミニにわか作りには親子11組が参加。約3カ月かけて完成させ、にわか祭本番前の8月19日には、『ミニにわか祭』を行って町内を練り歩いた。

「できるだけ本物に近い作りを教えることで、若い親たちににわかの作りを知ってもらうようにしました。子どもたちには、祭りの言い伝えなどを教えながら一緒に町を練り歩きました」

鵜川の歴史を暦にしたカレンダーは、公民館歴史教室のメンバーが文献を調べたり、寺への聞き取り調査などを行った。掲載する項目は、議論を重ねて120項目に絞り込んだ。

「暦には、今は行っていない行事や祭礼のほか、久田船長や原勤堂など郷土の偉人の生没日、鵜川郵便局の開局日など、鵜川にとって大切な歴史が掲載されています。知らなかった地域の歴史を知ることで、ふるさとを再発見するきっかけにしてほしい」

地区約500世帯に配布されたカレンダー。地域住民には好評だという。

「公民館の役割は、地域を元気にすることと文化の伝承。そのための発信場所であること。タウン誌の制作や昔遊びの復活など、やりたいことはまだまだあります」と意気込む。

地域を見つめ直す鵜川公民館の活動が、郷土愛を育んでいく。

梅田真人 館長

小間生公民館

Omou Community Learning Center

江戸時代から伝わり、大正初期に廃れた「久田和紙」。小間生公民館は、復活した伝統文化を「地域の宝」として保存継承に取り組んでいる。

【右】協力してコウゾの苗を植える柳田中と小木中の生徒。原料として使えるまでには、最低３年かかる。
【上】繊維を柔らかくするために棒でたたく。約２時間、ひたすらたたく重労働も中学生が体験した。
【下】和紙で作られたメルヘンドール。みわ会が制作するさまざまな作品は、年々人気が高まっている。

【所在地】字小間生ル -23
【世帯数】195
【公民館長】谷内静雄
【電話】76-0275

「久田和紙を守り、育てていくためには原料であるコウゾの確保が欠かせません」

小間生公民館長であり、久田和紙の製法を受け継ぐ『みわ会』の会長でもある谷内静雄さんは、特色ある事業でコウゾの移植・植栽を提案。６月８日に久田地区の休耕地２００㎡にコウゾの苗50本の植栽と、山に自生していた若木50本の移植に取り組んだ。

作業には、今年度から里山里海交流を実施し、卒業証書用の和紙づくりを体験する柳田中学校と小木中学校の３年生が協力。みわ会メンバーや地元造園業者らと一緒に汗を流した。

「移植・植栽したコウゾはおおむね順調に育っています。安定した原料確保のためにも３００本を目標にしたい」と語る谷内さん。「荒廃地を活用することで、久田地区をコウゾの一大産地にしたい」と意気込んでいる。

昭和63年に旧小間生小学校の体験学習として復活した久田和紙。小学校の閉校を控えた平成13年９月にみわ会が設立され、その技術を受け継いだ。

「久田和紙という眠っていた地域の伝統文化が発掘され、復活し、受け継がれました。地域に根差した活動に光を当てるのは、公民館しかできません。みわ会を公民館活動の中核に据えて育成していくことで、久田和紙の保存継承をしていきます」

高齢化や後継者不足など、抱える課題は決して少なくない。

「継承していくためには、地域の皆さんの理解と協力が欠かせません。そのためにも公民館の規約を作るなど体制づくりも必要と考えています」

久田和紙という原石。地域を巻き込む公民館活動が原石を磨き、輝かせる。

谷内静雄 館長

【寄稿】

公民館の底力と元気な地域づくり

金沢大学地域連携推進センター教授　浅野秀重さん

地域における公民館は、地域の方々が「集い合い、学び合い、高め合い、結び合う」ことのできる場であり、「昨日と違う今日の自分、今日と違う明日の自分つくり」の場でもあります。

さあ、公民館へ行って、新しい自分つくり、自分育てをしてみませんか！

公民館の役割（底力）

「こうみんかん」は、地域住民に対し学びの機会を提供する「公民の館（やかた）」であるとともに、行政や地域の各種団体・機関と地域住民との「間（あいだ）」に位置し、必要に応じて地域住民と行政とを結ぶ公民「間」、地域住民にひとや体験・自然等との出会いの場を提供しその「感性」を豊かにする公民「感」、社会のしくみや地域課題などについての学びをとおして人生観や職業観などものの見方や考え方に影響を与える可能性を持つ公民「観」、地域住民に地域で生き、暮らし、働き、支え合いそして学び合う歓びを提供する公民「歓」、地域住民を強い絆で結び強固な環を形成することに寄与する公民「環」、さらには魅力的で活力ある地域づくりの中核的な幹（みき）となる場、あるいは地域づくりの担い手、リーダー（幹）を育てる公民「幹」というような役割を負っています。これらを、筆者は、公民館の「底力」と言っています。

町民憲章と能登町の公民館

町民憲章によると、能登町は、「土と水を愛し、安らぎのあるまち」「健康で、心のふれあいを大切にするまち」「働くことに感謝し、創意と工夫で活力あるまち」「歴史に学び、スポーツと文化を育むまち」「能登町に誇りをもち、世界と未来にひらけるまち」をめざしています。

こうしたまちをつくるためには、能登町に住まう地域の皆さんが、能登町の魅力や課題をしっかり確認することが大切で、そのためには「学びの活動を通じて地域を知ること」です。

地域についての「学び」なくして、地域の良（善）いもの、直さなければならないもの、残さなければならないもの、必要なものなどは何なのかを判断することはできないと思います。

そうした学びの機会や考える機会を提供する場が公民館であり、公民館活動を通じて、地域の方々が、強い絆を結び、つながり合うことが求められています。

世界農業遺産の認定と公民館活動

町民の皆さんご承知のとおり、２０１１（平成23）年６月、伝統的な農業や文化風習・生物多様性の保全を目的とした「世界農業遺産」に、「能登の里山里海」が認定されました。

能登は、長い農耕の歴史を持つ地域であり、あえのこと、アマメハギ、農村の原風景など能登独特の営みや景観が継承されています。地域に古くから伝わる農業や伝統的・文化的資源を活用しながら、次世代へ継承すべき重要な農法や生物の多様性等を有する地域として国連の機関から認定されたことを契機に、今一度、自らが暮らし、生活する「能登」を学び、地域の世界的な価値を再認識し、地域住民の一人ひとりが自覚的に、時には地域一体となって、その保全・継承に取り組んでいくことが期待されています。

能登町は、新たに予算措置して「特色ある公民館活動」を奨励し、その様子が、このたびの広報で紹介されています。

予算措置も広報の特集についても敬意を表するものですが、それぞれの地区の特徴や特色を生かした公民館活動は、世界農業遺産を生かしたまちづくりにかかわろうとする自覚的な住民育てにつながるとともに、地域の様々なグループの多様な活動の展開により、遺産や地域文化を保護・継承するための輪が相乗的に拡がることになると思います。

地域の活力、魅力ある地域は、決して人口、生産額、観光客、ハコものの数などで評価されるのではなく、その地域の住民の意識によるものではないでしょうか。そうした意識形成に、学習活動は不可欠であり、その活動拠点が、公民館です。

【PROFILE】あさの・ひでしげ
昭和 29 年千葉県生まれ。石川県立小松女子専門学校、石川県県民生活局、石川県教育委員会事務局等の勤務を経て、平成 10 年から金沢大学教員。石川県社会教育委員、日本公民館学会理事など。